

## 技術指導と国際交流を図りながら、 中国の総合芸術大学にオーケストラを作る。

経済発展を続ける中国。しかし、さまざまな歴史的背景から、文化のグローバル化に対応しきれない面もある。そうした現状から脱却するため、中国陝西師範大学 音楽学院では東京藝術大学の協力を得て、自前のオーケストラの育成を目指している。2009年12月には2回目となる日中合作のオペラ公演が開催された。

楽器はあっても、指導者不足でオーケストラが存在しなかった。

中国陝西省の西安。かつての長安は中国史上もっとも著名な旧都市だが、現在は中国東部の北京、上海と比較すると文化的にも見劣りしている。西安にある陝西師範大学音楽学院は総合芸術大学であるものの、ピアノや声楽が中心でオーケストラが無かった。楽器は揃っていても指導者がいなかったからだ。

同学院の学院長である田大威さんは、音楽学院にオーケストラを整備し「オペラ」を上演するという夢を抱いた。学生の実技能力を高めるためには、それがどうしても必要だと考えたのだ。

田さんは15年間東京藝術大学に学び博士号を取得した声楽家でもある。その母校のつてを頼り、オーケストラ整備のための支援を仰いだのである。東京藝術大学教授で、国際交流室長の守山光三さんらは、この要請に応え支援チームを設立。2007年から教授やOB、学生などを派遣して指導にあたった。

「藝大としても、東アジアの音楽文化のネットワークづくりは重要な事業ですし、そのハブ拠点としての役割を持ちたいと考えていましたので積極的に支援しています」と守山さんは語る。

2007年に最初の公演として「カルメン」を上演した。そして、2回目の公演として2009年12月28～30日の3日間、「アイダ」を上演したのである。初回は技術的な面から参加できる中国人学生は少なかったものの、2

年後の今回は交流の成果として数多くのパートを中国人学生が担当できるようになっていた。

このような中、中国国内での注目度は高まり、陝西省や中央政府の幹部、財界人が観覧に訪れたほか、会場に入りきれないほどの観客で賑わった。会場は28、29日が大学内、30日が西安市人民劇院で、どちらも1,200名以上の定員というのだからその人気ぶりがうかがえる。またこの公演の様子は新華社通信をはじめ、中国内の多数のメディアに取り上げられて大きな話題となった。

楽譜という共通語があるからこそ、  
音楽はもっとも効果的に国際交流ができる。

「今の中国は経済的發展をする中で、西洋文化に強い憧れを抱いている」と守山さんは言う。しかし、日本が西洋の音楽と日本の音楽を分けて両立させたのに対し、中国では異文化の上に自国の文化をかぶせようとしたために、うまく取り入れることができずにいたそう。今回のオペラ公演が関心と呼んだのはそうした背景もあるようである。

守山さんは実技指導の他、サミットやシンポジウムでも頻繁に中国へと出向くようになり、お互いの親密度が高まっていることを感じている。

「他国との交流において、音楽は最高の手段なのです。言葉は通じなくても楽譜という共通語がありますし、一つの作品を作るという共通意識が自然と出てきて心が通じるんです」と守山さん。総合芸術であるオペラでは、オーケストラ、歌手、舞台装置、照明、衣裳など、関わるスタッフが多く、それだけに交流範囲も広いのである。



日中の若者にとって貴重な国際交流の場となった



年々レベルの上がる中国のオペラ



迫力あるステージに中国内でも注目が集まる



オペラに関わる日中のスタッフ全員が共通意識を持ち作品を作り上げていく

担当者より



若い世代の交流と可能性  
のために助成金を活用さ  
せていただきました。

東京藝術大学 学長特命 国際交流室長  
音楽学部 教授  
守山光三さん

渡航した後の費用はすべて中国側が用意してくれますが、行くまではこちら持ちというのが国際的な慣習です。ところが人数も多いため、渡航費用がかなりかさみ、今回の助成金は本当に助かりました。音楽だけではなく、日中の若い世代の交流と、将来の可能性のために利用させていただきました。

一方、公演に参加した日本の学生にとっても有意義な経験となった。一度でも国際交流を経験した学生は、海外へ飛び出すことを怖れなくなる。

「若い人達に、若いときにできるだけ多くの国際交流を経験させれば、お互いを知ることで世界平和にもつながります。それが最終的な目的です」と守山さんは語る。

また、中国には大学を卒業した日本の若者が指導者や演奏者になり活躍するマーケットとしても期待がある。中国には国立大学が700もあるが指導者は少ないからだ。

次回の公演は2年後の予定だ。オペラの場合、準備期間にそれだけの年月が必要なのである。演目はモーツァルトの「ドン・ジョヴァンニ」。前2回に比べてシリアスで、高度な技術が要求される演目である。「演奏能力の発展」と守山さんは位置づけている。

やがては、陝西師範大学音楽学院が独り立ちしてオペラを開催できるようになるだろう。中国の音楽の中心になる可能性もある。そしてそこから、中国全土へ広がっていく。

「そのときこそ藝大が東アジアの音楽文化のハブとしての役割を果たせたときだと考えています」と守山さんは語ってくれた。